

[WS-5] ワークショップ5：大腸癌イレウスの治療と問題点

司会：竹之下 誠一（福島県立医科大学医学部 器官制御外科学） 正木 忠彦（杏林大学消化器・一般外科） 特別発言：小西 文雄（練馬光が丘病院）

日時：2015年7月15日（水） 8:30～11:00 会場：第11会場(ホテルオークラ 4階 平安1)

WS-5-8 Niti-S 大腸ステントの有効性及び安全性に関する短期成績:大腸ステント安全手技研究会前向き観察研究

島田 守:1,10、岡 博史:1、吉田 俊太郎:2,3,10、伊佐山 浩通:3,10、山田 智則:4,10、富田 雅史:5,10、松澤 岳晃:6,10、猪股 雅史:7,10、高橋 慶一:8,10、斉田 芳久:9,10
1:守口敬任会病院 外科、2:東京大学附属病院 光学医療診療部、3:東京大学附属病院 消化器内科、4:名古屋第二赤十字病院 消化器内科、5:岸和田徳洲会病院 外科、6:埼玉医科大学総合医療センター 消化管外科・一般外科、7:大分大学 消化器・小児外科、8:がん・感染症センター都立駒込病院 外科、9:東邦大学医療センター大橋病院 外科、10:大腸ステント安全手技研究会

【はじめに】大腸ステント安全手技研究会にて Niti-S 大腸用ステント多施設共同前向き安全性観察研究を行ったので、その有効性、安全性に関する短期成績について報告する。【対象・方法】本観察研究は多施設共同の前向き症例集積研究である。全施設で倫理委員会の承認を受け、患者同意取得の上で、データを前向きに Web 上にて登録、集積した。登録期間は 2013 年 10 月 11 日から 2014 年 5 月 19 日で、悪性大腸閉塞の術前処置 (Bridge to surgery; BTS) および緩和治療 (Palliation; PAL) を必要とする患者を対象とした。主要評価項目は大腸ステントの臨床的成功率、副次的評価項目は、技術的成功率および有害事象発生率。技術的成功は、狭窄部位への 1 回での適切なステント留置とした。臨床的成功は、24 時間以内に画像で閉塞の解除及び症状の改善を確認できる場合とした。【結果】参加施設は 33 施設、総登録数は 205 症例であった。今回、14 例 (狭窄なし: 1 例、スコープが狭窄を通過し留置せず: 2 例、呼吸状態悪化で処置せず: 1 例、瘻孔あり処置せず: 1 例、データ不詳: 9 例) を除外した 191 例 (BTS 110 例、PAL 81 例) を解析対象とした。技術的成功率は 98.4% (188/191)、臨床的成功率は 96.9% (185/191)、留置後 1 週間以内の早期の有害事象発生率は、9.4%(18/191) であった。留置後 1 週間以内の早期穿孔はなく、ステント閉塞は、1.6%(3/191) で、原因は、拡張不良 2 例と stent kink 1 例、逸脱は 0.5%(1/191) であった。BTS において手術までの平均日数は、25.1 日。95.5% (105/110) で一期的な待機手術が可能で、腹腔鏡下手術率は、62.7%(69/110)。縫合不全は 2.9% (3/105) で、術後平均入院期間は、20.0 日であった。【結論】Niti-S 大腸用ステントを用いた大腸ステント留置術は、高い技術的成功率と臨床的成功率を示し、早期の有害事象発生率は、9.4% で、穿孔は認めなかった。